

公立学校と住民主導まちづくり組織が協働するプロセスデザインの研究

-兵庫県播磨町での取り組みを通して-

A PROCESS DESIGN OF COLLABORATIVE ART-WORKSHOP
Collaboration with Public School and Machizukuri Organization in Harima Town

倉知 徹 デザイン学部環境・建築デザイン学科 助手
川北 健雄 デザイン学部環境・建築デザイン学科 教授
相良 二郎 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授
佐々木 宏幸 デザイン学部環境・建築デザイン学科 准教授
谷口 文保 先端芸術学部クラフト・美術学科 講師

Tohru KURACHI Department of Environmental Design, School of Design, Assistant
Takeo KAWAKITA Department of Environmental Design, School of Design, Professor
Jiro SAGARA Department of Product Design, School of Design, Professor
Hiroyuki SASAKI Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
Fumiyasu TANIGUCHI Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Assistant Professor

要旨

兵庫県播磨町では、2007 年以降住民主体のまちづくり組織、旧播磨北小学校施設運営協議会（以下協議会）が中心となった地域づくり活動が行なわれている。2009 年度に兵庫県立東はりま特別支援学校が開校し、公立学校とまちづくり組織の協働による取り組みが開始された。本報告は、2009 年度に取り組まれた協議会が中心となった協働によるアートワークショップについてのプロセスデザインの報告である。

アートワークショップでは、県立播磨南高校芸術類型の生徒と県立東はりま特別支援学校の生徒が作業を分担し、協力して絵を描いた。描かれた絵は、多くの人に見てもらうためにギャラリーでの展示が行なわれた。また、成果を参加した人に配布することと、より多くの人に配布するために別の媒体に加工することとした。描かれた絵の一部を取り出し、ポストカードとクリアファイルに加工し、地元住民等に配布された。

このアートワークショップのプロセスを通じ、それまで交わることのなかった人同士が協力し、協力して創作活動を行うことができた。また、このプロセスを通じ、多主体が協働する際のきっかけと内容を明らかにすることができた。

Summary

The community building activity led by the Machizukuri organization called ex-Harima North Elementary school Facilities Management Conference (NE-FMC)) has been implemented in Harima town, Hyogo prefecture since 2007. In 2009, Hyogo prefectural East Harima Special Needs Education School (EHSNES) was founded, and the collaborations of community building activities began. This paper reports the process design of the art workshop thorough the collaborations implemented in 2009.

In the artwork shop, four paintings were drawn through the collaboration by students of the Harima South high school and students of EHSNES. The paintings were processed to postcards and clear files, and distributed to a lot of people. Through the collaboration, student could interact each other, and the process clarified the chances and the contents of collaborations between multi-groups.

1. はじめに

近年、まちづくりや都市計画の分野において、多主体の協働が求められるケースが増えている。しかし、多主体が協働する際のきっかけと協働の方法が不明な場合が多い。そこで本稿は、兵庫県播磨町（以下：播磨町）で取り組まれている住民主導まちづくり組織が中核となった公立学校との協働による地域活動において、多主体が協働する際のきっかけと取り組みの内容、最終成果作成までの一連のプロセスのデザインについて報告を行なう。これら協働による地域活動、今回はアートワークショップを通じた取り組みを 2009 年度の共同研究のケーススタディとして実施した。

2. 播磨町の概要と地域づくり活動の経緯

兵庫県播磨町は、兵庫県播磨地域の東端に位置し、播磨灘に面する工業地帯の一角を占めている。終戦直後までは農村地帯であったが、阪神間の人口急増と重工業の発展に伴い川崎重工業等が立地する住工農混在地域となった。

30 万人規模の明石市と加古川市に挟まれた播磨町の人口は約



34,000 人である（2010 年 3 月）。
図 1. 播磨町の位置

旧播磨北小学校施設運営協議会（以下協議会）は、2007 年 3 月の町立北小学校（以下北小）の廃校に伴い、廃校後の跡施設の管理運営を目的として、2007 年 6 月に住民主体の組織として設立された。北小の跡施設の管理運営の方針を検討している中、兵庫県教育委員会から北小跡施設を県立特別支援学校として使いたいとの申し出があり、協議会との連携・協力を条件として 2009 年 4 月兵庫県立東はりま特別支援学校（東はりま特別支援）が開校した。協議会は地域交流・地域福祉・体験学習・スポーツを活動の柱として、地域交流イベントや体験教室等の地域づくり活動を行っている*補注。

3. アートワークショップ（コラボアート）の取り組み

3-1. アートワークショップの構成

協議会が中核となり、東はりま特別支援と兵庫県立播磨南高等学校（以下、播磨南高校）が協力・連携して行なうアートワークショップを行なうこととなった。これは、東はりま特別支援が開校し、北小跡に発達障害のある児童・生徒が通学することとなったが、地域での特別支援学校に対する理解や地域での受入れ態勢が未成熟であると考えられた。そこで、特別支援学校の生徒の得意分野である創作活動（絵を描く）を通じ、地域の人との協働による創作活動を行うことをめざし、取り組むこととした。

しかし、地域の人との協働といった際、問題点も浮上した。一つ目は、東はりま特別支援が開校直後であるため、障害の度合いによる生徒の行動を予測しきれない点、二つ目は新設校であるため教諭側の経験値と地域側の経験値が不足している点、三つ目は美術活動の協働の度合いが不明な点である。これらの問題点に対し、自力通学ができる障害の軽い生徒を中心とすること、地域側の参加者を同年代の播磨南高校の生徒とし、教諭の指導のもと参加すること、同時に協働で絵を描くことを止め、段階毎の分業制にすることとした。

3-2. 段階毎の分業制

絵を描く段階毎の分業制とは、木製の B1 パネルを 2 枚つなげ、それに下絵を描く準備段階と、出来上がった下絵に自由に絵を描く描画段階、描画後に不足部分の色を塗ったりする仕上げ段階にわけ、準備段階と仕



図 2. 松の木の下絵

上げ段階を播磨南高校の芸術類型の生徒に、描画段階を東はりま特別支援の生徒に担ってもらうこととした。

準備段階で描く下絵は4種類とし、播磨町にゆかりのある松の木（町の木、図2）、菊（町の花）、赤灯台（海の象徴物）、大中遺跡（町の歴史）とした。

3-3. 描画段階での作業

2009年8月20日（木）に東はりま特別支援の教室で、東はりま特別支援の生徒13名と播磨南高校の生徒15名が集まり、下絵を描いた木製パネルに自由な絵を描いた（図3～6）。



図3.はじめの挨拶



図4.作業風景1



図5.作業風景2



図6.作業風景3

描画段階での作業は、東はりま特別支援の生徒のみが絵を描いたため、播磨南高校の生徒はその様子を見守ることとなった。松の木の下絵に描画したものを図7に示す。描画段階のこの日の作業時間を約2時間としたため、線画が中心となり、色を塗り込む所まで達成できなかった。



図7.松の木の下絵に描画したもの

3-4. 仕上げ段階での作業

描画段階で色を塗りきれず、線画が中心となったために、仕上げ段階で着色を行うこととした。当初、この仕上げ段階は播磨南高校の芸術類型の生徒に行ってもらった想定であったが、東はりま特別支援の生徒自身に着色してもらう方が、オリジナリティのある絵になると判断し、9月1日の始業式の午後に着色してもらうこととした。着色後の松の木の絵を図8に示す。



図8.着色後の松の木の絵

播磨南高校の芸術類型の生徒が描いた松の木に、東はりま特別支援の生徒の独特の感性の人物や野菜、乗り物、背景の着色等が相まって、鮮やかで多様な要素を含む絵が出来上がった。

4. 着色後の展示

アートワークショップで制作した絵は、播磨南高校と東はりま特別支援の生徒、協議会の関係者以外に見てもらうために、播磨町内のギャラリーで約1週間展示を行った。展示の風景を図9に示す。



図9.ギャラリー（石ヶ池公園内）での展示風景

協議会では、ギャラリーでの展示に合わせ、同じ会場で夕暮れコンサートを開催し、より多くの人に見てもらえる取り組みも行った。

5. 加工、作成

作成した4枚の絵は、B0サイズの木製パネルであるため、まとめて常時展示することは困難であった。また、多くの関係者が関わって作成したので、参加した関係者の手元に置いておけるような別の媒体に加工することが求められた。そこで、別媒体として数種類の検討を行った。その中から、ポストカードとクリアファイルにすることとした。このクリアファイルは、単なるクリアファイルではなく、簡易型の手提げ袋になる「Motte ファイル」とした。これは手提げ袋になっているため、簡単な書類等を入れて持ち歩くことができることと、取っ手部分を取り除くことにより通常のクリアファイルとなり、長期間使うことができるため、関係者に配布後、使用される頻度が上がり、目に触れる機会が増えると考えたからである。

クリアファイルのデザインは、印刷の工程上の条件から表から裏にかけてのデザインが可能であった。4枚の絵から、比較的完成度の高い部分を取り出し、一つのまとまりのある絵に加工し直した（図10）。播磨町は南が海に面し、市街地には農地が混在し、山陽新幹線や国道が横断し、大中遺跡等の拠点があり、遠くに山が見える地形となっている。クリアファイルのデ



図10.手提げ袋型のクリアファイル

ザインでは、この播磨町の構造をモチーフに、取り出した野菜や乗り物、動物等を配置することとした。

一方ポストカードは、裏面に4つの絵を一面に掲載し、表面にはクレジット等を配置した（図11）。



図11.4つの絵のポストカード

これらクリアファイルとポストカードを近隣住民や、多くの関係者に配布した。

6. まとめ

本報告は、播磨町で行われた、協議会が中心となり播磨南高校と東はりま特別支援が協力し、B0サイズの鮮やかで多様な絵柄のある4つの絵を描いたアートワークショップの取り組みのプロセスデザインについて記した。さらに、絵を描くだけではなく、ポストカードやクリアファイルに加工し、多くの関係者に配布し、成果を周知することができた。そして、この取り組みを通じ、多主体が参加し協働する際のきっかけと内容について明らかにした。今後は、協働による創作活動の継続や、協働の度合いを深めること、より多くの人に参加できる仕組みを構築することが必要であると考えられる。

【補注】 文献1)、2)に詳しい。

【参考文献】

- 1) 倉知徹、「住民主導のまちづくり組織による協働のプロセスデザイン-兵庫県播磨町での施設運営の取り組みを通じて-」、『芸術工学2009』、
<http://kiyou.kobe-du.ac.jp/09/report/23-01.html>、2010年7月最終アクセス
- 2) 倉知徹、「住民主導による地域づくりのプロセスデザイン」、芸術工学会誌、2010年1月、pp96

【協力者】

橋本大樹、加藤慧、大西久美